

ME革命を生きた旋盤工の物語：小関智弘からの聞き書きの記録

萩原, 進 / HAGIWARA, Susumu

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / 経済志林

(巻 / Volume)

75

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

363

(終了ページ / End Page)

400

(発行年 / Year)

2007-07-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003116>

【紹介・資料】

ME革命を生きた旋盤工の物語

——小関智弘からの聞き書きの記録——

萩原 進

目 次

1. はじめに
2. 聞き書き：その（1）生い立ち
3. 聞き書き：その（2）見習工時代
4. 聞き書き：その（3）町工場の遍歴時代
5. 聞き書き：その（4）NC旋盤工への転換
6. あとがき

(以上本号)

1. はじめに

日本の暮らしを支えているのは、“ものづくり”の力であるといわれている。あらゆる産業が、日本の暮らしに貢献しているといえるのであるが、とりわけ“ものづくり”の分野、すなわち製造業のそれが際立っているように思われる。

製造業なかでも機械工業の活躍振りには、眼を見張らせるものがある。日本の機械工業には、世界市場でトップの座を占める巨人が目白押しである。ホンダ、カワサキ、スズキ、ヤマハのオートバイ4社、石川島播磨重工、三菱重工、住友重機、川崎重工、日立造船、三井造船の造船・重機6

社、東芝、日立、三菱、松下、シャープ、ソニーの電機6社、それに最近GMを追い越して世界チャンピオンの座に就いた自動車のトヨタ…などなど、まことに枚挙にいとまがないほど巨人企業が多い。

日本の機械工業の“ものづくり”の力がかくも強大なのは、どうしてなのであろうか。わたくしは日本の機械工業の競争力の源泉について、かなり長いこと研究を続けてきた。その結果1990年代の中頃に、日本の機械工業の世界市場における優位の原因について、ほぼこれでよいのではないかという結論に達することができたと思っている。

日本の機械工業が有する国際競争力の基盤は、大工場から町工場にいたるまで全国津々浦々にマイクロエレクトロニクス革命（ME革命）が進行していく過程で、ME技術を駆使できる知的熟練工の大群が形成されたことによって、抜群の“ものづくり”力の構築に成功したことにあるのではないか。これがわたくしの辿りついた、競争力の謎を解くための作業仮説にはかならない。

＊ “知的熟練”の概念は、わたくしがもっとも深い学恩を受けた小池和男先生によって彫琢された概念であることは周知の通りである。

以来わたくしはこの仮説にもとづいて、金属機械産業の中小企業の調査と研究を行ってきた。ところがある日、行きつけの古書店で古本をブラウジングしていたところ、小関智弘『大森界限職人往来』（1981年）という本に偶然出くわすことになった。手にとってパラパラと眼を通してみたところ、面白そうな本なので買って帰って、夜に寝床で読み始めたのである。期待した通りの面白い本であった。その夜は結局徹夜の読書になってしまった。

それからわたくしは、旋盤工・作家である小関智弘さんが書いた本はも

とよりのこと、新聞や雑誌に掲載された氏のエッセイや論文の収集に着手し、片端から読み始めていったのである。小関さんの著作のほとんどすべてが、町工場の労働者と工場主（おやじさん）たちの仕事と生活に関するものである。小関さんが書き残してくれたルポルタージュは、膨大な量に達するが、これらのルポルタージュは小説も含めて、戦後日本の機械工業の労働史に関する貴重なドキュメントといてよい。

小関さんの51年に及ぶ旋盤工人生には、節々に興味尽きないドラマが散りばめられている。腕のたつ熟練工が、40歳代の半ばになって、突如マイクロエレクトロニクス革命という技術革新の大波をかぶって右往左往するなど、まことに波乱の多い人生であった。作家であった小関さんは、このME革命の大波が大森・蒲田の町工場にどのように波及していったのか、その経過をみずからの体験にもとづいて詳細に記録しておいてくれたのである。したがって小関さんからの聞き書きは、戦後日本経済の発展過程を研究するための第一次資料として、絶対に残しておかねばならないとわたくしは考えた次第である。

この聞き書きは小関さんの家の書斎において行われた。第1回インタビューは2007年3月1日（木）に、第2回インタビューは3月8日（木）に、それぞれ3～4時間の長時間にわたってなされた。以下は、その2回にわたるインタビューの記録を整理したものである。

2. 聞き書き：その（1）生い立ち

鮮魚仕出し屋の二男坊に生まれる

萩原 それではこれから、インタビューを始めさせていただきます。
京浜工業地帯の一角を占める東京大田区の大森に生まれ育ち、2002年4月

に引退するまで51年の長きにわたって大田区内の町工場で旋盤工として生活してこられた小関智弘さんから、体験談を語っていただきながらいろいろお話をお聞きしようと思っています。まず始めに生い立ちからお願いします。

小関 昭和8年に大森で生まれたわけですが、私の父親が明治36年生まれ、母親が38年生まれで、共に大森の出身でして、昔の明治のことです。2歳違いです。明治36年に父親が生まれて38年が母親です。子供の頃は家がほとんど隣、隣というのは500メートルぐらい離れているのですが、間に1軒も家がなくて、じかに家が見えたそうです。500メートルもない、直線距離にしたら300メートルぐらいでしょうか。あとで測ってみるとそんなところですよ。

親父は魚屋です。早くからもう魚屋です。親父は小学校6年で卒業して、そのあと中学に1年間だけ行くのですが、正確には家庭の事情で、父親から学校なんかに行く必要はないと無理やり退学させられて1年で終わってしまったのです。母親は勉強好きではなかったそうですが4年まで行って、4年で終わったようです。明治三十何年ぐらまで小学校というのは4年制だったのですが、途中から6年制になるわけで、母親の時代には6年制が当たり前なのですが、まだたぶんその頃は、4年でやめる子が結構いたのだらうと思います。母親も4年でやめてしましまして、地元の地場産業で真田紐を編むという真田織り、麻真田という麻の紐を編む地場産業が大森にはありまして、その工場で雑用として働いていました。

そして、小学校を卒業する年まで2年間働いて、晴れて就職してもいい年になって、親戚の子に連れられて、当時はもう電車になったと思いますが、大森から川崎の駅に行って、川崎で階段を上がってすぐのとこに工場の入り口があった。それが当時東京電気で、のちに東芝になります。東京電気と芝浦製作所が合併して東芝になるのですが、その東京電気の電球女工になります。小学校卒業ですから12から東京電気で働いて、数えの18歳で親父と結婚して魚屋の嫁さんになってしまう。その間にできたのが私

です。

萩原 お母さんが結婚されたのは18歳の時ですね。

小関 母親が18歳ですね。だから父親が20歳だと思います。実際には、生き残っているのは、兄1人、その次は私ですが、本当は兄の上に2人女がいて、私と兄の間にも男がいてというように私の上の3人が死んでいまして、結局私と兄と、弟と妹と、残ったのは4人です。母親は7人産んでいるのですが、皆、生まれてほとんど1年以内に死んでいます。当時は多かったと思います。

私が生まれたのが昭和8年です。すでに親父は魚屋をやっていまして、その頃はかなり羽振りのいい魚屋だったそうです。私がかすかに記憶している範囲で言っても、まだ店に何人か住み込みの小僧さんがいたりしていました。お得意さんが山王で、私の家は入新井で線路の向こうの海寄りのいわゆる低地、低地と台地に分ければ低地になるわけですが、山王の高台側のお屋敷に出入りをしていました。お店を持たない魚屋です。私が覚えているのは大きな木の冷蔵庫があったり、家の中の土間に大きな四角の木で作った水槽があってそこに生きた魚が泳いでいたり、子供の記憶ですがかなり大きかったように思います。

ともかく、山王のこのお屋敷町を中心にして出前だけでやっていたという魚屋です。親父はどこでどうしたかは私はわからないのですが、ともかく料理が上手で仕出しも兼ねていました。つまり、こういうお屋敷町でお得意さんの日常的に食べるおかずというだけではなくて、お客さんが来るとかお祝い事があるとか、何かあるたびにお料理を作ったり折り詰めを作ったりということをやっていました。きんとんを練るのから羊かんを作るのから家で全部やっていました。鯛をきちっと焼いて、そこに羊かんから何から全部を家で作ってしまうというようなことをやっていましたから、それは私の子供の頃にも記憶があります。

お得意さんの記憶で、私が非常によく記憶しているのが徳富さんとか久原さんとか。歳を取ってからわかったのですが、徳富さんというのは徳富

蘇峰で、久原さんというのは久原房之助です。今の八芳園まで魚を納めに大森から行っていたのです。それは間違いなく、ほかの叔父さんや叔母さんもちゃんと証言してくれて、おばさんが届けに行ったことが何度もあるというお話で、久原房之助が飼っているオウムが彼女のことを覚えていて、魚を届けに行くと、「魚屋のおばちゃん、魚屋のおばちゃん」とオウムが言ったんだよと。久原房之助が「魚屋のおばちゃん」という言葉を教えたらいいのですが、そのくらいですからかなり信憑性があります。

あと、服部さんが服部金太郎で服部時計店の社長、のちにセイコーの社長になるわけですが、そういう人たちが山王の高台のお屋敷町に皆いたわけですが、そういうところに入入りしていたのです。

萩原　お父さんは、魚屋と仕出し屋を兼ねていたわけですね。仕出しの仕事は、魚をさばいたり調理したりするわけですから、仕出し屋には料理人の技量が必要とされるわけです。お父さんはどんな修業をされたのでしょうか。

小関　それが全然聞けないうちに……。とにかく周りの人が、腕がよかったと。死んでから聞いたので覚えているのは、大森の河岸でマグロをおろさせたら「魚信」の右に出る者はいなかったと言われたくらいに、そのマグロをおろす腕もあった。だからマグロ師、マグロ師と言われていたと言うのです。

あと親父が、昔大森に魚河岸がありまして、その大森の魚河岸にはほかの魚屋が朝行って、問屋の魚を買おうとすると、「まだ信さんが来てねえから待っているや」と。要するにうちの親父が来て買わないうちはほかの魚屋に売らなかったという伝説がありました。どの程度かわかりませんが、ほかの人から聞いた話では、信さんというのはそういう人だったそうです。

萩原　小僧さんは、多い時は何人ぐらいいたのでしょうか。

小関　人数は、そんなに大きい家ではなかったから私が覚えているのは、屋根裏部屋に2人とか3人とか、それも親戚の親父の弟がいたり、おふくろのほうの弟がいたり、あとは何か親戚の者がいたり、あとは新潟の

ほうから出稼ぎに来ている者がいたりという話ですが、そんなに大勢いたわけではないようです。

相田 魚屋になるために修業にきていたとか、そういう小僧さんではなかったわけですね。

小関 そうではないと思います。親父の弟などは独立して、後に魚屋になりますけれども。私はそんな魚屋のせがれで、生まれた頃はまああ羽振りにはよかったです。確かに、小学校を上がる前に近所の子供だと小遣いはかなり制限があったと思いますが、我が家は広い縁側のある家で、縁側にざるが置いてあって、ざるの中に小銭がじゃらじゃらおいてあって、そこから自由に小遣いは持っていいというような家でしたから、きっと、そのくらい羽振りはよかったのだと思います。

どこかに書きましたが、それでも口の中に私が金を入れて振り回して、近所の子供にいくら入っていると行って威張り散らしたのを親父にみつかってぶん殴られて（笑）。

萩原 お父さんがやっていた魚屋の魚信は、店というよりも住宅だったわけですね。

小関 そうです、家を兼ねているのです。

萩原 その家は、今の入新井にある小関家の家と同じところ…。

小関 今の家とはちょっと違うんですけどもね、でも近くです。そこから歩いて5分かからない。

萩原 そうですか。

工場と住宅が混在する大森・蒲田

小関 まあ、そんな環境でしたね。子供の頃に、もう少し物心ついた頃で、隣が町工場だったのです。近くに溶接工場があったりいくつか工場があって、私は工場をのぞくのが結構好きだったということは記憶の中にあります。その工場のせがれと仲が良かったということもありますけれども。

私は、働き始めてしばらくたってからもまだ、大田区が日本の産業の中でどういう位置にあるということをまったく知らないで働いていたのです。多少ものを書くようになっていろいろ調べていくうちに、おやおや、大田区というのは日本の産業の中でも大変特徴のある地域なのだというのがあとからわかるわけです。それまでというのはただ普通にそこで遊んでそこで働いてという程度だったわけですからわからないのですが。

京浜急行の大森海岸の駅に瓦斯電（東京瓦斯電気株式会社）という会社の大きな工場が、私が生まれ育った入新井という町からすれば町のはずれになるわけですが、瓦斯電という工場がありまして、そこがともかく目につく、私たちが子供の頃に歩いて目につく、たった一つの大きい工場だったわけです。

萩原　　瓦斯電は、現在のいすゞ自動車の前身と考えていいですか。

小関　　そうです。いすゞ、日立工機、日野ディーゼル、それからゼノアといういくつかの工場が、後に戦時中から戦後にかけて独立して、工作機械を作っていた部分が日立の系列に入って日立工機という工作機械を作る部分になるわけです。それから自動車、ディーゼル関係が日野ディーゼルといすゞという二つの会社になるわけです。

後にそうやって発展するわけですが、私がいた頃はまだそうはなっていないくて。

萩原　　今のいすゞの本社あたりに瓦斯電の工場があったのですか。

小関　　あれもなごりです。あの辺りも大森駅の東口、大森海岸に抜ける太い道路がありまして、大森駅から行ったら左側がいすゞとか日立の建物、今でもビルがありますが、それは当時のなごりであるわけです。もうちょっと海のほうに向かっていって右側、今はもう大きなマンションとイトーヨーカドーになってしまいましたが、それ以前はアサヒビールのビール工場でした。それ以前、戦争で焼けてなくなるまでが、ずっとそこが工場でした。ピーク時には千何百人いた工場ですから、大きいと言えば大きいですよ。それが町の中であって、あとは小さい工場が転々とある。そ

の転々とあった工場がほとんど、あとでわかったのは瓦斯電の下請けです。瓦斯電で働いていて独立した方が始められたのが、その町の中にあった工場だったようです。

相田 工場が増えてくる前の大森は、海苔の産地だったと小関さんの書かれた本に出てきますが。

小関 大森はそうなのです。

萩原 それが工場地帯に次第に変わっていく。

小関 工場地帯に変わっていく、大きな変わりは戦後なのですが、戦前から前後しばらくまでというのはいわゆる浅草海苔の本場というのは大森ですから、町の中に小売りではなく製造する海苔屋さんがありました。ですから、冬になると家の周り、町の中に海苔干し場が道路際に朝早くから立てられて、そういう風景がありました。

萩原 どちらかという、小学校にあがる頃までの大森は、中小企業の町に変わっていくちょっと前の漁村のような大森と考えていいでしょうか。

小関 そうですね。小学校の頃でしたら工場はまだそんなに多くないですからね、むしろ勤め人と、あとはそういう漁をやったりですね。私が生まれた頃という、圧倒的に勤め人が多くなるわけですからね。震災後は一気に人口が増えて。

萩原 先ほど大森駅から海寄りにいって右側の工場というのは、日本特殊鋼（ニットク）の工場のことですか。

小関 ニットクはもっと海寄りです。

萩原 1000人を越える従業員がいたというのは？

小関 それは瓦斯電の工場です。ですから、今の日立とかいすゞのビルがあるあたりからもうちょっと海寄りにかけてずっと工場があって、そこが瓦斯電だったわけですから。

萩原 もう一つ、大井に国鉄今のJRの工機部がありましたですね。

小関 大井工機部ですね。

萩原 はい、国鉄の大井工場です。近くに大井工場があったために、機械工が大森にたくさん住んでいたということはなかったでしょうか。

小関 例えば私の小学校の同級生でも大井工機部へ入った者もいますからね、それはあるかもしれませんが。

萩原 まあ、大井工場には大きな社宅がありますから、大森からの通勤者は少なかったかもしれませんが。

小関 ああ。でも、大森の場合でしたら、新潟鉄工が蒲田にありましたし、東京計器とか結構大きいものがあちこちでできていますからね。でも、そうですね、大井工機部も大きかったですからね。私の小学校の同級生が大井工機部の木工部に入っていました。そのくらいですから、やはり大森の子供もあちらに通っていた者はいると思いますね。

相田 東京電気の工場は少し離れたところにあったのですか。

小関 東京電気というのは？

萩原 品川の方にあったのじゃない？東芝のことでしょう。

相田 お母さんが通っていらっしゃった工場のことです。

小関 それはもう、早くに東芝に変わってしまいますね。芝浦と合併して東芝に。それは川崎です。今、つい最近全部売ってしまって商業地域になりましたけれども、つい最近まで川崎の駅の階段を上ると東芝の入り口になっていました。

萩原 川崎駅前の堀川町でしょう。

小関 堀川町と言うのでしょうか、名前は知りませんが、あのあたり一帯が東芝の。

萩原 そこに通っていらっしゃったのですね、お母さんは。

小関 はい。結婚するまで通ったそうです。当時、請負いで結構お金が取れたものだから、周りの人たちからもったいないもったいないと、そんなに早く嫁に行くことはないではないか、そんなに稼げるのにと言われたそうです。勤めている間に島田を6回結ったとか、そういうことだけはよく覚えているのです(笑)。旅行だとか慰安会だとかお正月だとかという

たびに、勤めている間に6回結ったと。生涯島田を結ったのはそれだけなのですが。

ただし、おふくろの父親というのは人力車夫で貧しかったものですから、正月をすぎるとすぐに着物を質屋に入れられたと言っていました。

萩原　そうですね、あの頃の製糸女工とか紡績女工という、すぐに細井和喜蔵の『女工哀史』に描かれているように、非常に悲惨な生活であったと思われがちなのですが、働いている本人はすごく生き生きとしているのですよ。なにしろかなりのお金を、現金収入が少ない農家などに持ってくるわけだから、親にとってある意味で金の卵を生む鶏ですよ。

小関　そうだと思います。

小学校時代——兄は三味線（全甲）、弟はアヒル（全乙）

萩原　ところで小学校の入学は、今の日本と同じ7歳でしたか。

小関　その当時でも、数えて7歳ですよ。

萩原　昭和15年の4月に入学したのですか。

小関　昭和20年の春卒業ですから昭和15年入学になります。

萩原　小学生時代は戦争中ですね。

小関　ええ。第二次世界大戦が始まるのは入ってからですけども、入って1年か2年で小学校が国民学校に変わるわけです。

萩原　お兄さんは五つ年上ですから、学校では上級生だったわけですね。

小関　ええ、兄は五つ年上で、とにかくその上に2人姉さんが死んでいるものだからすごく大事に育てられて、頭にはえがたかただけでおふくろがぶん殴られたというくらいでしたから、それほど大事に育てられたそうです。頭もよくて、当時小学校の成績は全甲で、中学も結構頭がよかったらしくて、当時の府立四中というところへ行って、4年で旧制高校へ入って。

萩原　府立4中は現在の戸山高校ですか。

小関　　そうですね、今のね。それで4年で今の埼玉大、昔の旧制浦和高校へ行って、旧制浦和高校2年で東大へ行って、東大に入ったときに一番年が若いわけです。

萩原　　皆ストレートで進んだ。

小関　　全部、中学が5年制だけれども4年で高校へ行ってしまっ。

萩原　　飛び級、飛び級で進級していった秀才ですね。

小関　　ええ。普通は高校も3年だけれども2年で東大へ行ってしまったわけですから、一番若くして東大へ行ってしまった。頭もよくて家でも大事に育てられてということらしいです。確かにそうなのです。

萩原　　小学校は小関さんと同じ小学校ですか。入新井の…。

小関　　一緒です。入新井第五小学校です。ともかく私が学校に入ったら、兄さんにはできたのにあなたは どうしてできないんだと言われて（笑）。私が小学校に入ったときに一番最初の通信簿がアヒルの行列で、全部「乙」、全乙です。兄貴は全部「甲」で三味線というのです。「甲」の字は三味線で、兄貴の通信簿は全部三味線。私は「乙」の字、アヒルの行列と言われました。学校の先生に、兄さんにはできたのにお前は どうしてこんなにできないのかとよく怒られたもので、それだけは本当にもうよく覚えています。何かあると、兄貴はあんなにできたのにお前はと 言って怒られて。

萩原　　小関さんの書かれたものの中に、お兄さんの話はかなり頻繁に出てくるのですが、弟さんや妹さんのことはあまり出てきません。

小関　　そうですね。そんなに書いていないと思いますが、二つ下が弟で、その三つ下ですから5歳下が妹です。結局、兄貴は東大在学中に夫婦養子で結婚して家を出てしまいますので、戦後は私が一番上になって弟と妹という家族になるのです。

萩原　　そのあたりは、さらっとしか書かれていませんが、相当複雑なものがあったのではないかと考えられます。まず第一に、お兄さんはそもそも長男ですよ。

小関　　ええ。

萩原 長男を養子に出してしまうというのはかなり異例なことですよ
ね。

小関 そうですね。何か親父は変にそういうところがあって、それはもう自由だというようなところはありましたね。親戚から総反対食ったらしいですが、私は子供だったからその頃はよくわからなかったけれども、何でそんなのを養子に出すんだとって、後々まで親戚からはよく言われていました。親父は何か、好きなものは仕方ないとか、行ってしまうものは仕方ないとかいう感じだったらしいです。

そして家がものすごく貧しくて、戦後すべて失って親父は飲んだくれてという状況の中でだったから、そういうこともあって、何か親父にすれば経済的にもうやっていけないというようなこともあったのかなとは思のですが、割合簡単に行ってしまったんですよ。

萩原 夫婦養子というのは、どういうことなのでしょう。

小関 相手の親戚の家で子供がいない家があって、そこに夫婦で入り込んだ。名前は、姉さんの親戚だから姉さんのほうの実家で池田と言うのですが、池田の姓になりまして。家もあったし土地もある程度ありました。姉さんの実家の池田というのは、大森の大きい海苔屋だったのです。2人とも小学校の同級生で、同じ小学校で兄貴と姉さんは小学校のときから同級生ですから、変な意味ではなくて仲良かったらうし家も近かったし、それで結婚したわけです。向こうにすれば東大出の婿さんを迎えられるということで、向こうの親戚にすれば大変なあれだったのでしょうけれども。

それと、我が家は焼けてバラック生活をしていたから、いずれは、ある程度働いて収入を得るようになれば、家のことも何とか考えるからというようなことを言っていたらしいのです。実際に行ってしまうばなかなかさうもいかないでしょうし、私家が何とかして建てるからと言ったときには、まだ早すぎるとかささん嫌なことを言われて。

萩原 お兄さんは東大を卒業して、入られた企業は東芝ですか。

小関 松下電機です。

萩原 松下ですか。学部は何学部だったのですか。

小関 工学部です。工学部を出て営業に入ったのです。松下がちょうど、いわゆる家電からハイテクのほうにどんどん発展していくその最中だったから、工学部出の技術の分かる営業ということで大変重宝だったのではないでしょうか。兄貴の葬式のときにいろいろな人が来てくれてその名刺を見たら、兄貴が松下の中でどういう部署を歩いたかがよくわかると言って、うちのせがれがそれを見ながら、おじさんはすごい道を松下の中で歩んでいたんだねなどと言っていました。

私にはよくわからなかったけれども、せがれがたまたま、全然関係なく松下に入ったのです。宣伝事業部というところに兄貴とは関係なく入ったものですから、葬式に来た人の名刺を見たらだいたい兄貴の足跡がわかると言って、おじさんが歩いた道というのはすごい、松下がちょうど発展していくのに沿っていたみたいだよというようなことを言っていました。兄貴は本当にエリートコースで、松下創立以来一番若い課長と言われたそうで、とんとん拍子に出世していくのですが、早く死んでしましまして。そういうあれで我が家とはほとんど縁が……。近くに住んではいましたけれども。

萩原 姓は池田姓ですか。

小関 ええ、池田です。

萩原 小関ではなくて池田に。

小関 夫婦養子ですから。

兄が養子に出ってしまったので…

萩原 小関さんは高校を卒業して、北村製作所を振り出しに旋盤工の見習として働きながら、バラック建のボロ家を立て直すために必死で働いた話を書かれています。ただの回想記ではないので少し小説的に書かれているとは思いますが、雪の日に家の前の道を通る女の子たちが、“焼け残りのトタンで作ったバラック建の家が東京にもまだあるのね”と言ってい

るのが聞こえてきた。それで家を建て直すことを決意して、工場の仕事が終わってから小学生の家庭教師などをやりながら、最近の言葉でいうとダブルワークをやって、一生懸命お金を稼ぎ、大工の棟梁から借りたローンを何とか返した。確か2年ぐらいで完済ですよ。

小関　　当時ですから家が安かったということももちろんありますし、相当無理して働きました。昼間は工場で、まだ見習工になって何年もない時期だったのですが、工場長が私に気を遣ってくれて、家庭の事情がそうということだったらと稼がせようとしてくれたようです。あとでわかるのですが、請負い仕事をやりなよと言ってきて、それで普段は常備で1日当時100円ぐらいで、月にすると25日働いて2500円です。残業などは多少ありますが。

ところがちょっと慣れてきたときに、数ものといって同じものをたくさんやるときには、常備ではなくて請負いでやってしまう。1個いくらで請け負ったら稼げるからそれでやりなよと言って、当時まだ、一人前の職人さんが6000円とか8000円しか取れないときに、私も6000円、8000円を請負いで稼いでしまったのです。ずっと請負いではないのです。そういう仕事 came ときだけやれということでやるのですが、カメラの部品だとか自動車の部品などで、同じものを何百とか何千とかとやるとき、ちんたらちんたら時間でやるよりは、1個やればいくらということでやれば一生懸命やりますから、それで請負いでやらせてもらいました。

そして義理の姉さんが京橋小学校の先生で、ちょうど5年生、6年生を持っているような時期だったから、家庭教師を欲しがっているところに行ってくれないかと言われて、4人ぐらい受け持って、会社が終わるとすっ飛んで、その足で京橋へ行って家庭教師をやりました。ですからそれでかなり稼ぎました。

それで2年ぐらいで、もちろん借金して、兄貴も多少出してくれました。あと、親父の弟が質屋をやっていたからそこから借りたり、そんなことであと足りない分は大工さんが、お前ならいいよ、面倒を見てやるからと、

当時初めて月賦というものを知りまして、月賦でいいよということでした。まだ、殖産住宅などというものはない時代ですから、月々返せばいいよと言ってくれたのでそれに甘えて、何とか、本当に小さい家だったのですが、とにかく新築することができました。

萩原 その時まだ20歳ですよね。

小関 そうです。18歳で働き始めて、22歳のときには借金を返しましたから、本当に働き始めて4年間ぐらいで借金を返してしまいましたね。

萩原 そのあたりの話は読むたびに、思わずホロっときてしまいます。

小関 確かに、それは実際に本当に聞いた話だったのです。女の人が家の前で、トタン板1枚しか囲いがいいような家でしたから、表の会話が筒抜けで聞こえるわけですし、立ち止まって明らかに我が家をさして、東京にもまだこんな家があるのねと話をしているのが聞こえてしまったものだからね。

それと、卒業した年が昭和26年ですが、東京でもものすごい雪の多い年でして、忘れもしないけれども2月などは町でスキーがやれたぐらい雪が降ったのです。ですから家に雪が降ると、朝目が覚めたら布団の上が真っ白に（笑）、柱とトタン板を囲っているぐらいですから、隙間から雪がね。

萩原 雪が家の中にまで吹き込んできてしまう。

小関 雨は何とか防げても、雪は吹雪になったら皆入りますので。その年は何回か、朝に目が覚めたら布団の上に雪があったという経験をしていましたから。もうこれは働いて、とにかく何とかこの家だけはやらなければしょうがないということで決意してしまったのです。

萩原 普通に考えると、実家が貧しくなった場合、子供たちが力を合わせて、特にお兄さんが旗を振って家を再建していくものです。しかし東大出のお兄さんは、小関家の再建の場に全然出てこないわけですよ。長男ではなく次男坊の小関さんが、獅子奮迅の努力と苦勞をして何とか窮状を打開していく…。

小関 兄貴は、正確に言うともまだ早いと言って反対したのです。私の

力がそんなにあるとも思わなかったでしょうし、そんなにがんばりが利くとも思わなかっただろうし、兄貴も勤め始めて何年でもないし、いずれはある程度面倒を見なければいけないくらいの気持ちもあったのかもしれないけれども、まだ早いと言い出したわけです。家なんか建て直す時期ではないといって反対したんです。だからしょうがない、いやもういい、おれがやるからということになってしまった。

多少は援助してくれたらしくて、僕にはなくて親父のほうにこれだけ出すからといって何かくれたそうですが、大した額ではなかったですね。何千円、何万円かはくれたのかな。確か、家を建てたときは18万ぐらいで建ててしまいましたからね、大した額ではなかったんですよ。あのころはまだ安かったですからね。

萩原　しかし、家を建てるというのは大変なことですよ（笑）。僕が書いた『町工場の世界』に出てくる20歳の時の小関さんの話しは、今の若い人たちに是非とも読ませたい話だと言ってくれた同僚がいました。今の若者は、苦労しらずで恵まれ過ぎていますからね。

小関　そうですね。わからないですよ。話をしてもわからないかもしれないけれども、とにかくあの頃というのは、働いてもらった給料というのは全部親にあげるとというのが当たり前ですからね。町工場で働いていた連中は皆そうですね。私も本当に親にあげて、そっくり渡して、ただ中から何百円か小遣いをもらおうよと言って抜いて、残りは全部親父に、おふくろに渡していましたから。

確か、働き始めて4年目だったと思いますが、親父が、自分の弟が質屋をやっていて、質屋に行って紺の背広上下を質流れで、お前の体にぴったりだと思うからと持ってきて、4年目に初めて、せめてお前、背広を一着くらい持っていろやといって買ってくれたのです。生まれて初めて背広というものをそういうかたちで親父から、質流れの中古で買ってもらいました。初めての背広です。それまでジャンパーしか持っていませんから、ジャンパーで通していました。そんなことは、町工場の労働者だったら、た

ぶんそれは不思議ではなかったと思いますね。私などは背広を持つなどという特別な欲求もなかったからよけいにそうかもしれません。まあ当たり前だなという感じで、親父はそんなことを気にしていたのかと思って。

萩原 私なども兄弟・姉妹が多かったものですからよくわかります。特に女の子はかわいそうでしたね。男の子は皆お兄さんのお古を着させられてもなんとか我慢できます。当時歳の下の子が着ていたのはいつもお兄さんのお古で、新しいものを買ってもらったことはほとんどなかったのではないのでしょうか。だけれども、女の子はやはりかわいそうでしたね。女の子は、お古を嫌がりますから。

小関 そうですね。どこかで書いているからお読みになっているかもしれませんが、妹が親父にそんなにいろいろ買ってもらえないから、よく私が小遣いをやって、シャツを買えとかスカートを買えと買ってあげていて、妹は伸び盛りですからどんどん成長してしまうでしょう。そうすると着られなくなって、下にいないからその妹の古着というか、着られなくなってしまったものを持って工場に行って、女工さんにあげたのです。その女工さんにちょうど妹より何歳か年下の子供がいて、私は記憶が全然なかったのですが、ずっと後に『おんなたちの町工場』の座談会をやってもらって、その本の一番最後に、当時一緒に働いた3人の女性に来ていただいたのです。そのときに、「あんたによくね、妹さんのお古をもらっちゃってさ。うちの娘なんか、よく覚えているんだよ、あんたのこと。いつも、まだそんなに悪くないものを持ってきてくれた」と言われました。私は全然覚えていなかった。そうしたら、あんたがよく持ってきてくれたと言っていました。

その頃は、そんなのは別に不思議でも何でもなかったのです。あとでそれを言われて思い出したのは、私は子供が生まれたときに、やはり町工場で働いていた女の人が、お母さんがこれを作ってくれたよとあって、自分の家で着ていた浴衣の寝巻きの古いものを皆おしめに作り変えて、それで2番目の子供が生まれるときだったと思いますが、風呂敷包みにして、お

母さんが作ってくれたから持っていったと、事務所の女の子が私にくれたのを覚えています。その頃は、お互いにそんなことをやっていたね。

相田 リサイクルですね。

小関 そうですね。本当にそうだと思います。

戦争中—魚信は金属のこぎりの目立屋に転業

萩原 小学校時代の小関さんの生活はちょっと複雑ですね。新潟に引越したり、埼玉県に疎開をしたりしますので。

私は、小関さんが旋盤工になっていく社会的な背景として、小学校の時代が重要だったのではないかと思うのです。というのは、大森と蒲田後の大田区が金属機械工業の大集積地になっていくのが丁度この時代だったからです。京浜工業地帯というのは実は、川崎から横浜にかけて東京湾沿いに埋立地が造成され、埋立地に沿って形成されました。川崎、鶴見、子安、横浜ですね。東京の品川区のほうには電機の手企業が集中して設立されました。大田区は、品川・芝浦と川崎のちょうど中間で、漁村と麦稗真田と麻真田の産地に過ぎなかったのですが、関東大震災のあとに山の手である山王と馬込のほうがまず高級住宅街化していき、続いて戦時の重化学工業化を背景にして海寄りに一挙に町工場が増えていき、大森・蒲田・糀谷・羽田・六郷が工業地帯に変貌していきます。機械関係の労働者が増えたのは、やはり満州事変以後だと思っています。

小関 関東大震災と戦争です。それは間違いないですね。

萩原 小関さんが旋盤工になったのはなぜかということについて、小関さんは偶然にそうなったように書いておられます。最初の勤め先であった北村製作所で、働き手が3人いたのが1人突然やめてしまって、旋盤が1台余ってしまった。社長にこれで仕事をやれと言われて、それが旋盤だったから旋盤工になってしまったといったような書き方をしています。しかし実際はそうではなかったのではないかと。

実は小関さんはほかの本で、戦争中の旋盤工の賃金がペラポーに高かっ

たことを指摘しています。だから、旋盤工になれば一生食っていくには困らないし、かなりいい工賃も稼げる。仕事も、特に中小企業の場合は職人的な仕事ですから熟練工になれる。というわけで、小学校のときに潜在的に、旋盤工に対して暗いイメージではなくて、ものすごく明るいイメージをもっていたのではないかと、思うのです。お父さんと、質屋さんをやっていた叔父さんも、“これからは工業の時代だから工業に行け”と薦めた。その背景に、大森と蒲田の急速な工業化があったのではないかと私は推測していますが、どうでしょうか。

小関 自分ではそんなにわからないですよ。子供のときに隣に小林さんという工場があって。

相田 溶接工場ですね。

小関 いや、そこは機械工場なのです。溶接工場はちょっと離れているのです。そこは旋盤があって、あとであれが旋盤なんだと。鉄を削って切りくずが出ていましたから、それを子どものときに覚えていたから、ああ、やはり旋盤だったのだなという程度には覚えています。

ただし、そうやって鉄を削るということは知っていたし、それと戦争中に親父と質屋の叔父さんと2人で、金属のこぎりの目立てをやっていたから、その使い走りですら工場にのこぎりを納めに行き工場の中をのぞいたことがあったりして、何となく工場というのは自分の中でイメージがありました。ですから、就職するときに一番最初に行った工場が、旋盤があったたった3人しかいない工場だったのだけれども、とにかくここで働いて稼げばいいかというくらいで入ったのです。

そのときにいた職人さんが2人も旋盤工で、親父さんが仕上工で、職人さんからいろいろな話を聞いていて、とにかく旋盤というのは花形なんだということは言われていました。それとまともに見るのは、何といてもその2人の職人さんが鉄をきれいに削り上げている姿だったので、それはすごいなと。そして本に書いているとおり、100分の1ミリがどういうものか教えてあげるからこいなんで言われて、髪の毛を抜かれたりそんなこ

とをやられて、ともかくこれはすごいやとは思いましたね。

ただし、そう思ったけれども同時に、いや、これはすごい仕事だなと、難しい仕事だなというたじろぎもありました。ただし、私は何カ月もいなかった北村製作所の見習工時代というのは、本当に人生の中で際立った何ヶ月間でしたから、そこで見た旋盤工の姿というのは大きかったですね。ほかのプレスだとか溶接はまだ見ていないし、ちらちらと町の中で見たという程度ですが、その何カ月間の旋盤工の2人の削る姿、削られた品物を見ていたときというのは、本当に何かどきどきするという感じでしたからね。

萩原 あとで出てくると思いますが、小関さんが非常に尊敬していた旋盤工の藤井さんですね、その人の戦争中の体験談なども書かれています。私は、戦時中の機械工の賃金を調べたことがあるのですが、京浜工業地帯の旋盤工の賃金は…。

小関 高いですね。

萩原 めちゃくちゃ高い（笑）。まだ請負給の時代ですから、学校の校長先生などもかなわない高い賃金を機械工は取っていた。

小関 芸者を呼んで遊べたというくらいの賃金をもらっている人が、職人さんの中にはいっぱいいたようですからね。

萩原 職種を問わず機械工全体の賃金が高かったわけです。極端な労働者不足ですから、特に熟練工は決定的に枯渇してしまった。戦争中ですので、熟練工も赤紙で引っ張られてしまっている。

小関 そうですね。

萩原 だから、何となく旋盤工というのは稼げる、しかも仕事が皆からバカにされるような仕事ではなくて非常にプライドが高い仕事だ。そういうことを小学校時代から小関さんもお父さんも肌で感じ取っていたのではないかと思うのですが。

小関 そこまではなかったと思いますね。「粋な旋盤工、小粋な仕上げ」という言葉だって、工場に入ってから教わった言葉ですからね。工場

に入るまでは知らなかったですからね。2番目の馬込の工場に行ってから「粋な旋盤工」という言葉も教わるので、まだそれも見習工のうちですけどもね。馬込の工場の4年間までがだいたい私は自分が見習工だったということで、それ以降は4年過ぎたら、何となくいっばしの顔をしていましたね、図々しくも（笑）。本当はそうではなかったのですが。

“電工”に入学——「これからは工業の時代だ」

萩原 それでは中学校時代にいきます。中学はですね、ちょっと分かりにくいのですが“電工”に進学された。この学校は、名前がくるくる変わるのですが。

小関 入ったときは“電工”なのです。

萩原 昭和20年ですね。

小関 そうです。

萩原 1945年の4月に東京府立電機工業学校に入った。

小関 私が入ったときはもう都立でしたね。それで、戦争が終わるといわゆる工業高校が廃止されてしまいますので。6・3・3制ができると、私が中学1年で敗戦ですから、中学の3年の間はいわゆる義務教育になるわけです。そうすると、工業教育をしてはならないという学校制度に変わって、鮫洲高校という新制高校に学校の名前が変わってしまうわけです。

それがまた占領体制が解けて、私が卒業する1年ちょっと前ぐらいに工業教育をしてもよろしいということでこの学校が、普通高校からまたもとの工業高校に変わるのです。そのときに、もともとここには旧制の都立工業高専というのが同じ建物の中にあっただのです。これが都立大学になるので、高校も都立大学付属工業高校に変わる。私が卒業するときはこれになってしまうのです。学校は、入ったときと途中と卒業するときと、このように変わってしまうわけです。

それで高等学校に変わったときに、ほとんどの生徒は電気科へ行く、機械科へ行くで、もともと工業で入ったのだから工業をやりたいということ

で工業の教育を受けるわけです。ところが中に、私などと同じようにもう工業なんかやりたくないということで、途中でやらなくなってしまった生徒もいたわけです。もうやりたくないやという者が結構いまして、私の1級先輩の中でやはり工業教育なんかいない、やりたくないという連中が文部省に押しかけていって、冗談じゃない、工業で入ったものが途中で普通高校にさせられて、今度また卒業する間際になってお前は工業やれと言っても、そんなのはおれたちはできないと言い張ったのです。

そうしたら文部省が、なるほどあなたたちの言い分も無理はないということで、あなたたちが卒業するまで工業高校の中に普通科を設ける。そして臨時に普通科、理科という名前でしたが普通科を設けてくれたのです。ですから私たちの1級先輩と私たちだけ普通科というのがあって、私たちが卒業してしまうともう普通科はなくなってしまうのです。

萩原　普通科はすぐなくなってしまうのですね。普通科があったのは、1級上の最上級の学年だけなのですね。

小関　1級上と私たちの学年だけが普通科なのです。

萩原　これは鮫洲高校の同窓会名簿です。(萩原が同窓会名簿を開く)。ここに、普通課程、小関智弘、大田区山王、作家、と一人だけ名前がでています。

小関　このあと、電気科などはずいぶん同窓会やったりクラス会をやったりしていますが、私たちのほうはもう全然なしです。ばらばらになって、大学に行く者は行ったし。

萩原　この学校は、今の言葉でいうと中学高校一貫教育ですね。この時期を小関さんはどのように過ごされたのですか。とにかくこの“電工”というのは、東京府が日本全国のモデル工業高校にしようとしてつくった学校です。だからスタッフも、すごい人材を集めています。小関さんは、慶応大学の経済学教授の清家篤さんを知っておられるでしょう？あの清家さんのおじいちゃんが電工の校長だったのです。

小関　清家篤さんのお父さんが、建築家の清家清さん、おじいちゃん

が清家正さん。だから慶応の教授は孫ですね。よくテレビなどにも出ていますね。

萩原　　そうです、清家さんは労働経済が専門の経済学者です。

小関　　私がいた頃は清家正が校長で、すごいスパルタ教育をやりまして、B級戦犯で追放されるのです。追放されるのだけれども、また帰ってくる。

萩原　　非常におもしろいですね。日本の機械工業の競争力の秘密は、工学部出の技術者と高専または工業高校出のテクニシャン、エンジニアとテクニシャン、それに工場の熟練工が協力しあいながら、現場でうまく生産体制を組んでいる点にあるのではないのでしょうか。僕は、日本のものづくりの成功の秘密は、あんがいその辺にあるのではないかと思っています。その点について小関さんの御意見を、あとで是非聞かせていただきたいと思います。

小関さんの中学高校時代は、敗戦、焼け野原の東京、労働運動の疾風怒濤のうねりの時代だったわけですね。

小関　　ただね、私は入った当初工業学校だったから製図もあれば電気もあれば機械もあったのですが、本当に4月に入って8月に終戦ですよ。終戦後もしばらくは製図の時間とか機械の時間とかがあったのです。けれどもそのうちに廃止されてしまうので工業教育はほとんど受けていないまままでいってしまうのです。ただし、周りの連中は皆、そのあと復活したときに電気か機械かに行きますからあれですけれども。

萩原　　お兄さんは東大の工学部に進みますよね。だから、何となく理科系的な雰囲気、機械いじりが好きといったような工業に対する親近感といますか、それが周囲にあったのではないですか。

小関　　私の場合は本当に、戦争中に親父の手伝いをしてのこぎりを納めたり溶接を手伝ったり、そんなことはしていましたが、ほかに特にものづくりが好きだったということではなかったのですよね。本当にもうこれからは工業の時代だという、大田区がそういう町にどんどん変わっていっ

た時代に、親父は魚屋でうまくいかなくなって工場を始めたということで
すから、そういう時代背景が一番大きかったのだと思います。

小学校から中学ですから、そんな自分で職業選択がどうのこうのなんて
わけがわかるわけではなく、親父がこれからは工業の時代なのだから工業
に行けと言われれば、そうなのかと思って行ってしまったという程度だっ
たのです。そして学校へ行ってからも本当に、そんなにほかのことを知っ
ていたわけではないのだけれども、途中から学校の近所の労働組合に出入
りするようになったりして、工場に出入りするようになって。

“電工”で暴れる——生徒会長，社研，文芸部員

萩原 旋盤工になった理由は、その二つだったということになるので
しょうか。戦後急速に台頭した労働運動や社会主義運動へのコミットメン
トと、もう一つは文学ですよ。高校時代から現在に至るまでずっと文学
を捨てていないというか、息が長いですよ。文学青年になってしまった
きっかけは何だったのでしょうか。

小関 一つは、戦争中に埼玉の蕨というところに家が。

萩原 疎開先ですか。

小関 疎開というか、正確に言いますと、一度魚屋をやめてしまって
新潟に我が家は行ってしまうのです。というのは、新潟から出稼ぎに来て
いた人たちがうちにいて、居候していて、店員も1人いて、新潟の季節労
働者で冬の間東京のほうへ出稼ぎに来る人が、我が家を足場にしてあちこ
ちに働きに行っていたという関係があったのです。我が家の屋根裏部屋な
のですが、何しろ居候が絶えなかったとおふくろがよく嘆いていましたが、
その新潟の人たち、その村の人たちが、1人が大森に、あそこに行けばい
いということになると皆が来るわけです。

相田 今の外国人労働者と同じですね。

小関 そうです。だから我が家には居候が絶えなかったと、おふくろ
がよくこぼしていたのですよ。というのは、そういう人たちがいつも出入

りしていたわけです。親父などは結局、昔の羽振りがいいあれで、親分風を吹かせて、ああ、いいよ、いいよでやっていたらしいのです。それがあって、戦争中に統制経済が始まって魚屋なんて嫌だ、目方で魚を売るなんて、そんなものは魚屋ではないと言った気風で、たんかを切って魚屋をやめたときに新潟に隠居すると。

新潟の人たちにすれば、旦那来てくれ、旦那来てくれたから、それで行ってしまったわけです。ところが行ったら向こうですぐに戦争が始まってしまって。行ったときに一つ打算があったのですね。あとでわかるのですが質屋の叔父さん、親父のすぐ下の弟が質屋をやっていて、質流れの古着を地方へ持っていけば売れるということで、おっちゃん、どうせ新潟に行くならそれをやれということで、親父はそれをやるつもりで、そういう心づもりがあったのです。それで行ったのです。

ところが統制経済で、衣料も統制経済で質流れも扱えなくなるのです。ほんの一時、何か子供の頃を覚えているのですが、新潟の疎開した家に近所の農家の人が大勢押しかけてきて、着物を着て皆で騒いでいる記憶があって、それがそうだったのです。ところが、それが結局統制経済になって、質屋というのは日本中、戦争が始まるとほとんどなくなってしまうわけです。それが新潟にいてもだめだということと、もう一つは、当時徴用工、徴用制度がすごく厳しくなってきた、このままいたらどうせ徴用で軍需工場にもっていかれてしまうだろうということがあって、質屋の叔父さんと父親が、それだったら工場をやろうやということになるわけです。

そして、質蔵を改造して質屋の家にモーターを入れて、金属のこぎりの目立てと修理の仕事をどこかで教わってきて始めました。軍需工場の下請け工場をやれば徴用は逃れられるわけです。2人とも質屋と魚屋ですから商人ですから、そのままだら当然軍需工場に動員されて徴用で働かされるのは当たり前、目に見えていましたので。それで軍需工場の下請けをやればいいということになりました。質屋のおじさんというのは頭のいい人だったらしくて、そういうことを始めたということですよ。

それで、新潟から帰ってこようとしたら、もう東京には入れないのです。それで仕方なく埼玉の蕨というところに長屋を借りて、それで大森の質屋の叔父さんと一緒にやる工場に通い始めるわけです。埼玉に住居は移ったのだけれども、埼玉と大森なら通えないことはないとは私は考えたのです。親父が毎朝通ってくるわけだから、それだったらもともといた学校に行きたい。一冬新潟の小学校へ行っていました。もう嫌だ。やっぱり大森のほうがいやということで大森の小学校に通い始めました。

たまたま我が家の家作に副校長先生が住んでいたものですから、親父がその先生に頼んで何とか通わせてくれないかと言ったら、当時のことから、まあいいでしょう、お父さん、一緒に朝晩通うならいいでしょうというようなことで許可されたらしくて、それで私は小学校4年から6年の途中まで、蕨から大森まで電車通学をしました。親父は電車で、大森の質屋の叔父さんの家で仕事をして帰る。私は小学校が終わって、学校が終わると質屋の叔父さんに手伝えと言われると、火を起したり何かを手伝ったり、出来上がったのこぎりを持って行けと言われれば、担いで工場に納めに行ったりということをしながら、だいたい親父と夕方に一緒に帰る。

そして帰るのに、電車で片道がちょうど1時間かかっていたものですから、本を読む癖がついたのです。もちろん当時ですから講談本ですが、それこそ猿飛佐助とか真田十勇士とか、夢中で何回も何回も読み直してというようなことで本を読み始めました。そのうちに本がなくなってくると、兄貴が五つ上ですから、結構兄貴が持っていた本をそっと借り出して、何となく覚えているのは『ヴェニスの商人』を子供の頃に読んだり、『キュリー夫人』などは終戦後ですが、『風と共に去りぬ』とか、兄貴が浦高へ行っていたのでそこから借りてきていたのだらうと思いますが、そういうものをわけがわからないままに、とにかく1時間、暇つぶしですから本を読んでもいけばいいというようなもので。

相田　それは座って読んだのですか。

小関　電車の中でね。

相田 座れたのですか。

小関 だいたい座れたし、座れなくても子供ですから、平気で読んでいました。それで本を読むのが好きになってしまったということですね。ですから、それが高じてというか、私は学校の成績は決していいほうではなかったのですが、あるとき、5年生になってからだと思いますが、担任の先生が、「らしい」とか「のような」というような字をひらがなで書いて、これを漢字1字で表せる言葉がある。だれかわかる者はいないかと言ったのです。

それで、何か本を読んでいたからか知らないけれども、私はその「的」という言葉をどこかで覚えていて、手をあげて黒板へ行って「的」という字を書いたらえらくほめられまして、お前どうしてこの言葉を知っていたのかと言われて。お前はよくそんな言葉を知っていたと、先生にほめられた一番最初ではないかなと思うくらいとにかくほめられまして、ほめられたのがうれしくて、何となく、本を読んだりすることがいいことなんだと思ったのだと思います。

萩原 それは小学校の何年生の時ですか。

小関 小学校5年ぐらいですね。それが一つ、大きな出来事でした。そして中学へ行って、国語が特別好きだということではないのですが、入ってまもなくして終戦で、今で言うクラブ活動、当時は生徒会と言ったのですが、いわゆる民主教育をやらなければいけないということで、生徒会活動が始まって、工業学校の中に文芸部ができて、担任の先生が国語の先生だったということもあるのですが、作文が好きだったのでしょうか、文芸部ができて、私は文芸部に入ってしまったのです。それがきっかけです。

俳句を作ったり短歌を作ったりという程度で、作文のようなものを書いたりして、手書きガリ版刷りの雑誌を出したものですからそこに投稿すると、採用されて載ってということがあって。そのまま文芸部でずっと、結局最後まで文芸部に、その学校が高等学校になって卒業するまで文芸部ということです。一番最後の頃はほとんど活動はなかったですけども、そ

れが一つきっかけです。

錚々たる文芸部の先輩たち——西村京太郎、北沢方邦

萩原 その頃の仲間で、後に推理小説作家になった人がいましたね。

小関 西村京太郎が同じ文芸部で1級先輩です。学年でいうと2級先輩だったのですが、彼は肺結核か何かで1年留年をして1級先輩なのです。学校にいた頃はそんなに目立たない人だったから全然交流もなくて、ただ先輩にしているという程度で親しく口を利いた覚えは全然ないのです。ただし、先輩たちの中に本当に文芸部、一生懸命文学をやるといふか勉強をするという人間がいて、後に大井工機部の中の文学サークルに行ったとか。

それから一番際立っているのでは、民芸に入って、民芸の文芸部に籍を置いていた坪松という者がいますが、たぶん今もいるのではないかと思います。ずいぶん昔に民芸の芝居を見に行ったらたまたま入り口で会って、文芸部にいるからいつでも来いよとか声をかけられたりしたことがあります。そういう者がいたり、あとは職場に行って、職場で何かそういうことをやっているという話を聞きましたけれど、それほど。

北沢方邦さんという人はのちに音楽評論家になったそうです。かなり有名な評論家になったそうです。学校にいたときからバッハ狂で、バッハのレコードばかり聴いていたというような男で、のちにバッハの研究者になるのですが、そんな人が先輩にいたりします。小さい文芸部でしたが、そういう人がいました。

私は、文芸部に籍を置きながら今度は社研ができて、社研のグループから目をつけられて、社研のサークルに來いと言われて、そちらに顔を出すようになって、文芸部に一応籍は置きながらそっちの勉強をかなりするようになって。あの当時ですから勉強したといってもあれですが、今も親しくしている先輩で本当に尊敬している人ですけれども、音楽部で楽器を吹いていて非常に優れたいい人で、その人は私が図書館に行って本を読んでいるとすぐにそばへ寄ってきて、いろいろな話を話しかけられてくるとい

うような人なのです。あるとき、ロシア5人組というのを君は知っているかと声をかけてきて、知らないと言ったら、これこれこういう音楽家たち、ムソルグスキーとかああいう人たちですが、そういう音楽家たちがいたのだというような話をしてくれる。

そのうち今度は、レーニンが帝国主義の三つの矛盾ということを行っているのだけれども、君、三つの矛盾というのは何かわかるかというようなことを聞いてくる（笑）。こちらはわからないから、レーニンとは何だろうと思って図書館へ行ってレーニンの本を借りて読んでみる。わかったかと聞かれて、わかりましたと言ってもどこまでわかったのかわかりませんが、そんなことでその彼の影響でそういう本を読むようになっていく。そうしていくうちにサークルに引っ張り出されたりして。

萩原　正式に入られたのですか、社研（社会科学研究会）に。

小関　社研というのは、主に隣の八潮という女子校があって、その生徒と鮫洲の生徒の有志達が学校の外でやっていたのです。学校の中ではなくて外でやっていたのです。今、農文協という出版をやっている、農村関係の本を出している有名な、すっかり大手になりましたが、その社長が会長をやっている坂本尚という人が、当時の高校の学生運動のリーダー格だったそうで、私はその頃名前しか知らなかったのですが。

萩原　何高ですが？

小関　八潮高校、八つの潮と書きます。

萩原　それは都立の高校ですか？

小関　都立です。両方とも都立で、隣ですよ。青物横丁にあって近かったですから。先輩たちはいろいろ交流があったらしくて、そんなことでサークルをやって、そこにはずいぶん顔を出していました。

そういうことであれしているうちに、昭和25年ですから朝鮮戦争が始まるわけです。まだ学校にいる間ですが、25年に朝鮮戦争が始まってレッドパーージが始まる。その前からそういう社研のあれもあって近所の労働組合がある職場に、小さい職場でしたがいくつか出入りして、労働者と交流し

たりということがありました。

大きくてよく覚えているのは日本光学ですけれども、日本光学のレッドパージがあったときなどは、社研を通して学校に連絡が入って、今、門の前で労働者が抗議活動をやっているから出て来いという指令がきて、よし、行こうと授業を放って何人かで行ってしまっ、日本光学の門の前で、レッドパージ反対なんてシュプレヒコールをやってみたり、私がそんなことをやるわけです。すっかり左翼少年を気取っていい調子になって。

ちょうどその頃に生徒会の委員長をやったり、生徒会の委員長になった頃はまだそれほどではなかったもので、文芸部のほうでロマン・ロラン友の会などということをやっていたから学校の中でも比較的目立つ存在で、学校の先生もあいつならというようなことがあったのだらうと思います。生徒会の委員長をやったりしていました。やっている間に極端に跳ね上がっていったものだから、学校が、こいつは困ったものだと思ったらしくて、そんな左翼的なことばかりやるのだったら生徒会は追放するといっ、陸上部の連中を動員して私を自治会から追い出すのです。そんなことをやられたりして学校の中でちょっと目立つ存在になりました。

萩原 私も実は高校時代社研のリーダーでしたので、高校生の学生運動の雰囲気はよく理解できます。その頃は60年の安保闘争、三井鉦山の三池闘争の支援が中心でしたが。

小関 私 はもうちょっと前ですからね。

萩原 私の高校生時代は、スターリン批判の後でしたのでもう全学連も分裂していました。小関さんの高校生時代の左翼運動は、ソ連が輝いていた頃の運動ですからとにかくロシア風だった。ロシア民謡だとかゴースキーの文学の人气が高く、ロシア語にあこがれる人も多かったですね。

小関 そうそう。

東大を受験するも進学は断念

萩原 都立大学付属工業高校を卒業した後、大学進学を断念して就職

してしまいますね。その頃の状況をお話し下さい。

小関 一つは、家の事情が本当に逼迫してしまっていて、これはどうしようもない。ともかく家の壁といってもトタン板でしょう。指で押すとズブッと指が……。焼けトタンといって、空襲で火をくぐったトタンを張り付けて上からコールタールを塗ってという程度だったものですから、終戦後6年もたつと指がズブズブッと突き刺さるようなトタン板で囲まれていた家ですから。本当にそうやって、雪が降れば雪が布団の上に積もるような家で、そこに弟と妹、弟が二つ下、妹が三つ下でいて、親父は飲んだけれど、魚屋をやっていたとはいえほとんどもう、自転車の後ろに積めるだけのアジやサバ、お惣菜を積んできて、おふくろに近所周りに御用聞きに行かせてという程度の稼ぎだから。

萩原 まだ店なしの魚屋だったのですか。

小関 店はバラックの先に小さくつくったのです。小さくつくってやっていたのですが、それだけの程度、本当に魚屋というほどの魚屋ではなくてやっていたものですから、ともかく家を建て直す以外にどうしようもない。弟や妹の学費ぐらいは稼いでやらなければいけなかったものだから、それが決定的な理由でした。

もう一つは、そうやって左翼少年になって、あちこち労働組合だの共産党の、当時「細胞」と言いましたけれども、出入りしてそういう連中と付き合っていると、勉強などというものは革命後でもいいとか（笑）、牢屋に入ったら牢獄の中で勉強すればいいんだという（笑）。

萩原 『私の大学』に出てくるような話ですね。ゴーストキーの。

小関 まさにゴーストキーの『私の大学』を地でいくような、そういうものに調子よく自分も乗かってというか、勉強なんかあとだって、いつだってできるというような思いがあって。だから、とにかく働いてしまおうと。働いて何年かしてゆとりがもしできたら勉強すればいいかという気持ちにはありました。ともかく働けということで工場に入ってしまったのです。

電気や機械科を出た連中は学校推薦があったのです。もともと近所の工場に優秀な先輩がいっぱいいましたから、結構大きな工場に先輩がいましたので、電気科や機械科の連中は皆そこで就職ができるわけです。ところが私は普通科ですから、皆、クラスのほとんどの仲間は大学進学、さもないければ家業を継ぐのです。進学はしなくても家の仕事を継ぐということでしたから、私も一応大学進学のため勉強はしていたのですが、親父や兄貴が、とにかく東大以外は大学ではないという考え方がものすごく根強くて。特に兄貴ですけれども、兄貴の影響があったのだと思います。それでもう行かないと。

一応成績があって、あの頃はアチーブメントテストで、どこの学校の生徒も一緒にテストをやって。それで一応東大も点数だけは取れていたものだから、親父が頼むから受けるだけは受けてくれというから受けには行ったのですが、落ちまして。こちらは全然受ける気もなかったですし、とにかく働くのだとあって、それで働き始めたのです。

萩原 そのときのお父さんの落胆ぶりについてはいろいろ書かれています。小関さん自身はどうだったのでしょうか。大学進学をあきらめたときの、何というのでしょうか希望のなさというか…。

小関 それはそんなになかったですね。というのは、一つはゴーリキーのような人がいるということ、学校を出なくてもこういうことができる人がいるんだということがあって、勉強はしなければいけないと思っていたし、実際働きながら結構私は本を読んでいたらしいのです。

ずっと後に、馬込で働いた会社の同窓会が開かれまして、30年後ぐらいになるのですが、そのとき専務だった方がまだ生きておられて久しぶりにお会いしたら、ほかの人はそんなに言わなかったけれども、その専務は、とにかく小関君は暇さえあれば工場でも本を読んでいたものねと言うのです。そんなに読んでいたかなという思いがあるのだけれども、結構昼休みに皆とバレーボールをやったり、中に弓道の好きな板金工がいて、その人に教わって弓を一生懸命引いてみたりということもやっていたのになと思

うのですが。ともかくその専務に言わせると、かなり年配の方でしたが、あなたはよく本を読んでいたよね、と。その頃は、もう私がものを書いているのはその人も知っていたものですから、やっぱりあなたはそうになりましたかなと言われて。だから読んではいたのかなとは思いますが。確かにそのように過ごしていました。

働き始めてすぐに、地域では活動しているのです。線路の向こう側は昔入新井という町でしたが、そこを根城にして青年会をやったり民青を作ったり、入新井青年会というものを作ったりしてそういう地域の活動をしているのです。それをやりながら同時に文学サークルを始めるのです。ですから、その延長と言えば延長でしょうか。皆で、ともかく働きながらという連中を集めて、ともかく本を読もうよということで本を一緒になって読んだり、文章を書いて、手書きやガリ版刷りの雑誌を出してみたりということはずっとやったわけです。

働きながら続けた文学修業

萩原　これは次回のテーマになってしまうかと思いますが、ついにお聞きしておきたいと思います。小関さんの作品は、芥川賞候補に2回ノミネートされ、直木賞候補にも2回ノミネートされます。『文学界』などの格の高い文芸雑誌にも、作品が掲載されるようになりますので、プロの作家になろうと思っても不思議ではないわけです。しかし、旋盤工をやりながらもの書きを続ける姿勢を変えようとしなかった。そここのところの微妙な小関さんの生き方というのが、僕にはとてもおもしろく感じるのです。

それともう一つ、小関さんは何故独立して会社を起こさなかったのか。この地域には、工場の熟練工だった人でも独立する人がものすごく多かったわけです。小関さんほどの熟練とキャリア、いろいろな知識がある人が、なぜ独立しなかったのであろうかと考えてしまいます。

相田　自営業の道を選ばず…。

萩原　そうです。自分で小企業を立ち上げるという道を、あえて選ば

うとしなかったのはなぜか。なれる可能性がありながら、職業作家の道も、小企業家の道もいずれも選択せず、旋盤工として人生をおくることを選択した。

小関さんは、大学進学を断念したということ、暗い話としてではなく、むしろすごく明るく書いておられますよね。3人しかいない北村製作所で、先輩の旋盤工の仕事振りをみていて、毎日感動を覚えない日はなかったと。本心はどうだったのでしょうか。その点を是非お聞きしたいのです。

小関　暗くはないですね。悔しいとか残念という思いはなかったですね。

萩原　私らが高校生の頃も、高校出て就職することに希望をもっていた人がいました。普通の恵まれた家庭に育っているので、経済的な理由で大学進学ができなかったわけではないのですが、高校で左翼運動をやり活動家になったために、企業に就職して労働組合運動をやりたいとか、そういうことを本気で考え議論する雰囲気が残っていました。何といいましょうか、労働運動に生涯をささげるという生き方が、人を感動させるというかしびれさせるような時代があったのですよね。今はもう、そんな雰囲気はまったくなくなってしまいました。

小関　確かにないですね、今は。

萩原　独立して自分で企業を起すということをしなかったということ、働きながら旋盤工の仕事をしながら文学活動をずっと続けていったというのは、どこかで皆つながっているのではないかという気がするのです。

小関　独立してやるというのは、私にはまったくそういうことをしたいという思いがなかったのです。その一つは、大きい影響は、たぶん商人が嫌いになっていたのです。それは父親です。父親の姿をずっと見ていて、そんなことを一般の商人に言ったら失礼なのですが、私が見ている商人は父親ですから。やはり外面はよくて、お客さんが来ればニコニコしてヘーヘーするけれども、家の中にいたら威張りくさって、本当に小心者のくせにとか、そういう否定、マイナス面をいっぱい親父を通して見ているので

す。商人だけは絶対に嫌だと。それと金勘定をするのが嫌いで、そういうことが一番大きかったです。だから、独立して自営するのも商人と重なる思いが私には非常に強くて、だから嫌なのです。

もう一つは、独立している人たちを結構見ていましたから。工場に出入りする人たちをたくさん見ていましたから、工場に出入りする自営業者の、何か卑屈な面を見てしまうわけです。町工場といっても、そんなに大きな町工場ではないのに、そこにまた出入りの、より小さい人たちがいるわけでしょう。一番小さいのは一人親方です。たった1人で旋盤1台据えているとか、研磨機1台で仕事をしているとかという人たちがいるわけです。そういう人たちがしょっちゅう工場へ出入りしているわけだし、おもしろい人たちではあるけれども、ある卑屈さというのはどうしても見えないのですか。そうすると、ああいうことをやらなければいけないのかというのが見えてしまう。ああ、嫌だ嫌だ、カツカツでもとにかく食べていけばいいという思いのほうが先に立ってしまうのです。

確かにずいぶん勧められました。勤めているところで、お前は独り立ちしたらこうなれるのだからやってみないかというのは、一番最初の馬込の工場の頃から先輩で独り立ちした人がいますから、お前ももうちょっとやって腕を磨いたら独り立ちしなよと。旋盤1台、退職金代わりに持たしてやるよと声はかけられましたし、それから後も、ずいぶん何回もありましたけれども、それが全然触手が動かなかったというか。

萩原　　実は小池和男先生から、私の学問の上での先生にあたる人ですが、小関さんに会ったら何故独立しなかったのかを聞いておいてくれと言われたのです。なぜ独立しなかったのか。小池先生の実家は、新潟の縫製業の中小企業なのですが、非常におもしろい先生で、法政大学の総長になった…あの…。

相田　　清成さん。

萩原　　中小企業論が専門の清成さんが、ベンチャービジネス学会というものを作って、大学生も起業をどんどんやりなさいといい出したのです。

小関　　ありましたね。

萩原　　そのことについてあるとき小池先生は、研究会が終わった後に飲み屋で、清成さんを痛烈に批判していました。清成さんはどうしようもないね、20歳台の若者に会社をつくって一発やってみると、とんでもないことをけしかけている、あおっている。20年、30年キャリアを積んだ人が、独立して事業をたちあげるならわかるけれども、と言って怒っているわけです。だいたい中小企業論などをやっているやつはほとんど信用しないのだから、と小池先生は言われるのです。自分の実家が中小企業だったから、中小企業の経営がどれだけ大変か、体験で知っている。だいたい中小企業の世界では倒産とは言わないのだから、夜逃げて言うんだと。債権者会議に集金に行かされると、昨日の債権者が今日は夜逃げしていて、債権者会議のメンバーがしょっちゅう変わる。会社がつぶれて社長がいなくなったとか、蒸発してしまったとか、小池先生は高校生の頃からそういう体験をしている。うちの会社などは、少年院みたいなものだともいっていました。若い従業員が会社の金は持ち逃げして競馬で使ってしまう。親を呼び出して説教して、コンコンと説教育てていかなければならない。すぐにクビにするわけにいかない。そういうことが清成さんは、わかっているのかな—と書いていましたけれどもね（笑）。

もしかしたら小関さんは、労働者主義とでもいえるような考え方をしていたのではないか、仕事こそが人生であるという職人の美意識のようなものがあって、企業の社長になる気はないという。そういう労働者主義のイデオロギーのようなものがずっと支えていたのではないかと思ったりするのです。それよりもむしろ、商売人の卑屈さへの反発のようなものが、独立志向を抑制してしまったのでしょうか。

小関　　そうですね。

萩原　　確かに、万年文学青年の小関さんには、商売とか金儲けは合わないですね（笑）。それではここでちょっと一休みしたいと思います。

The Impact of Microelectronics Technology on Machinists
—An Interview with Former Machinist Tomohiro Koseki—

Susumu HAGIWARA

Abstract

The machinery industries in Japan are very competitive in world markets. There are many famous brands whose parts are made by the Japanese machinery companies; for example Honda's motorcycle, Toyota's hybrid car, Sony's DVD recorder and so on. The most important source of competitiveness in the Japanese machinery industries seems to be the rapid spread of microelectronics technology among small-and medium-sized firms. Tomohiro Koseki worked for over fifty years in a small machinery workshop as an NC-turner. This paper is based on interviews conducted by Susumu Hagiwara with T.Koseki.